

今後の研究課題

調査結果の考察から、今後の研究課題を検討するにあたり、特に以下に挙げる点に着目した。

- 1) 塾・通信教育は、すでに子どもの学校外学習においては日常のものであり、受験志望があり、かつ学習意欲がある子どもは特に、このような民間教育機関を利用している。また利用者は実際に学習時間も長く、教科全般を好む傾向が高い。
- 2) 中学生は、親の自律性支援的な態度を自身の学習観に取り込み、その上で自身の判断で学習行動を行うのに対し、小学生は学習観への親からの影響は少なく、強制力が働くことで学習時間が長くなる。
- 3) 通信教育については、親は子どもの選択・決定を尊重するほど、子どもが自主的に取り組む。
- 4) 親がよかれと思って行っている学習支援と、子どもの側でのその受け止め方にギャップがある。
- 5) 理解を深めようとする傾向が高い子どもほど、学習への意欲が高く、自ら学習環境を整える。
- 6) 自分で自分のことを決めようとする子どもほど、学習自体に喜びを感じている。

本研究では「自己学習力」——すなわち、「自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力」を育てるためには、私たち民間教育機関を含め、どのような人・物的学習環境が望まれるか、という点を重視している。

以上に挙げた結果を考え合わせると、子どもに対して「理解を深めようとする」「自分で自分のことを決めようとする」傾向を支援する、もしくは子どものそのような意識を強めるよう、意識して教材を制作したり、それを助けるような親の働きかけを促すことが重要ではないかと考える。

そして、そのためには、私ども教育研究所としても、本研究を土台として、以下のような研究課題を今後に向けて検討していきたい。

- 1) 民間教育を利用している子ども・親の意識・行動に関する、より詳細な調査・研究
- 2) 小・中学生別の、親の子どもへの関与のあり方についての研究
- 3) 子どもの学習目標志向性（理解を深めようとする傾向）を高める、人・物的学習環境のあり方に関する研究
- 4) 子どもの「自己決定感」（自分で自分のことを決めようとする傾向）を高める人・物的学習環境のあり方に関する研究